

ガラパゴス紀行

2002 年 12 月 29 日～2003 年 1 月 8 日の 11 日間、ガラパゴス諸島をダイビングクルーズ船 SKY DANCER に乗り最北端のダーウィン島、ウルフ島まで足を伸ばして約 700 マイル（約 1,100Km）移動し、ダイビングと陸の見学をしました。ターゲットはやはりここにしかない海イグアナです。

今回は雨季でベストシーズンではなかったですが、水温は約 26 度で船の移動も快適でした。ベストシーズンは 6 月～10 月でジンベイ、マンタ、クジラなどの大物が見れる確立は高いですが、チリのほうから寒流のフンボルト海流が流れて来るため水温は 18～20 度と非常に冷たく、また貿易風が強くなるため波が高く、夜間の船の移動は非常に揺れるそうです。今回の出港と帰港はバルトラ島でしたが、海況によりサン・クリストバル島になる場合もあります。今回はダイビング終了後の 10 日目にサンタ・クルス島へ寄港したので途中下船し、ガラパゴス諸島最大の町プエルト・アヨラで 3 泊しました。

1. SKY DANCER クルーズ

【ダイビング】

北のウルフ島、ダーウィン島では毎回数十匹前後のハンマーヘッドの群れが現れ充分撮影出来ました。あるとき 4～5 百匹の大群が出ましたが、雨季で空が暗く、非常にシャイなため残念ながら撮影できませんでした。

ハンマーヘッドを待っている時にライトを点灯すると、1m 以上もあるビンナガカンパチの群れがライトの前に 100 匹以上も集まって来ました。肝心のハンマーヘッドが現れた時に他のダイバーの邪魔になるため、途中でビンナガカンパチの撮影を中止しました。

バットフィッシュ、サンフィッシュなどが見れるはずでしたが残念ながら見れませんでした。ガイドの表現ではバットフィッシュのサイズがかなり小さくココ島と比較すると半分ぐらいでした。イーグルレイ、マーブルレイ、ゴールドンレイ、ヤッコエイなどのエイ系が多かったです。

この海はどこの島でもウツボが半端でなく異常に多くサイズも大きく、生態も少し変わっていて穴の中に隠れていずにアッチコッチでフラフラと泳ぎ回っていました。その原因はナマコ漁を制限された猟師がターゲットをサメに変更して、フカヒレ目的の密漁でネムリブカやハンマーヘッドを大量に殺した結果、サメが劇減しウツボが異常繁殖していました。今までウツボがこんなに多い海は見たことがなかったので大変ショックでした。

ガラパゴスにとってハンマーヘッドはダイビングで世界的に有名なポイントで大切な観光資源になっているため、政府による厳重な密漁者の監視や海洋生物の保護及び住民の意識改革が必要と思います。

ベストシーズンではなかったですが水温は 26 度と高く、船の移動もあまり揺れずに快適でした。ココ島のベスト月は 8 月ですが、ガラパゴスのベスト月は 9 月だそうです。

ガラパゴスは赤道直下に位置しながら寒流と暖流が複雑にぶつかり合う特異な場所です。1月～5月は温暖季、雨季で気温が高く降雨量も多いですが、雨季の方がむしろ青空が広がることが多いです。6～12月頃は冷涼季、乾季にあたり朝晩の気温が10度を下回ることもあり、南東貿易風（ガルア）がもたらす雲でどんよりとした日が続きます。しかし、東から西へ流れるガルアの影響で表層の南北赤道海流（暖流）が東から西へながれ、それを補うために深層から栄養分の高い湧昇流が湧き上がり、南から栄養分豊かなフンボルト海流（寒流）が流れてくるため、イワシ等が浅場へ移動し水中の食物連鎖が盛んになります。ウミイグアナ、ペンギン、アシカ等の繁殖活動が盛んになり8月～10月頃にはザトウクジラ、マッコウクジラ、ジンベイザメ等がもっとも良く見れ、ハンマーヘッドの大群も水温の低い浅場へ上がってくる確率が高くなります。水温は最北のダーウィン島、ウルフ島で19～23度、セントラルエリアで18～20度になります。

ハンマーヘッドはハンマーの形をした頭の下にあるロレンチーニ器官が他のサメと比較して非常に優れているため、その頭をセンサーにして溶岩が出す磁場を感知し、溶岩の回りや溶岩の上を辿って海底の溶岩ハイウェイの上を泳ぐと云われています。

今回の透明度は20m～25mで良い時は30m。時々3度以上も低いサーモクラインがあり、その低い場所を好んでハンマーヘッドが群れていました。ガラパゴス諸島最北端のダーウィン島、ウルフ島は場所によっては流れが非常に速い場所があり、流されてもキャッチできるように防水用無線機を持たされました。ある時ダイブタイムが45分を過ぎたので水面に出ると2隻のゾディアックがどこにも見あたりません。使用するチャンスはないと思っていましたが、私だけがこの時1回だけ使用しました。ゾディアックにエキジットした後、ガイドが無線機をチェックしているので変だなと思って聞いてみると、無線機のスイッチをONにしてCALLしていたはずでしたが、ONのランプは点灯していなくて何の役にも立っていませんでした。結局、偶然ボートが来ただけでした。この時はガイドがかなり移動し、私は水中撮影で余り動かなかったので島の岩場近くの水面に上がりました。決して流されたのではないので最初から安心していましたが、防水用無線機を使うチャンスになりました。

ナイトダイビングは4回ありましたが、話しのネタにと思って1回目だけ参加しました。小物の魚影が少ないので余り人気がなく1回目はイギリス人夫婦と私の3人、2回目はイギリス人夫婦だけで、3回目以降は参加者無しでした。ナイトロックスの設備はありますが、使用ダイバーは誰もいませんでした。追加費用がいるのと30m以深へ行く機会が多いのが原因と考えられます。ブリーフィングは2人のガイドがしっかりと説明していました。

現地時間の朝6時（SKY DANCER 時間はキトと同じで7時）に起床し、7時半から1本目を潜り、午前中2本、午後1本、そしてLAND ツアー1回がノー

マルな1日ですが、LAND ツアーがない日は大体午後2本でした。全ダイブ数はナイトダイブ4本とチェックダイブ1本(10m10分)を含めるとMAX 31本可能ですが、今回のダイブ数は27本でした。

【LAND ツアー】

海イグアナ、アシカ、ペンギン、カツオドリ、ダーウィンフィンチ、オオフラミンゴなどが見れました。

海イグアナは陸上では寝そべっている時が多く、たくさん撮影できましたが、水中は簡単には見れないことが分かりました。また仮に見れても岩場の近くのため波が高く浅場で食事をするため、水中撮影は非常に難しいことが分かりました。残念ですが今回最大の目的でした海イグアナの水中撮影はまったく出来ませんでした。97年～98年のエルニーニョで水温が2度以上も上昇し、イワシが深い海へ潜ったためペンギン、カツオドリなどが繁殖を止め、海イグアナは海藻不足によって全体の1/3が餓死しました。陸から進化して海へ入った海イグアナの一部がエルニーニョの影響でまた陸へ戻り、現在は海イグアナのツメを持ったハイブリッド(中間)が生まれ、今までの陸イグアナが出来なかったサボテンに昇って花を食べることが出来て今も進化中です。

尚、海イグアナは餌が少なくなると身体を約75%に縮小する能力があり、現在、これを科学的に調べています。

アシカも陸上では寝そべっている時が多く撮影は簡単でした。また起きているアシカは向こうから寄って来る場合があり、人間に対してまったく警戒心がありません。但し、水中のアシカは非常に動きが速く、被写体として追いかけるのは並大抵ではありません。好奇心が旺盛なので結局、向こうから来るのを待って撮影しました。時々、こちらの様子を見にカメラのレンズを覗きに来ていました。

ダーウィンフィンチが折った枝を道具にして餌を取っているのを近寄っても逃げないため、かなりの至近距離で撮影できました。また、浅い湖には約100匹のオオフラミンゴがいたので、アップで綺麗なピンクの羽根を撮影出来ました。

ある時アオアシカツオドリがSKY DANCERのサンデッキの手摺に羽根を休めていたので、シャッターチャンスと思い、撮影しながら足や羽根を触りましたが、全く逃げずクチバシを指のほうへ持ってきただけでした。ガラパゴスの生物は人間を敵と思わないので動物園よりも慣れていて『これが本来の本当の大自然なんだなぁ』と感動しました。

ペンギンは3m以上離れるルールがありますが、陸の岩場で休憩しているペンギンを水中から1m以内に近づき、ビデオが逆光だったためマスクとフィンを取り外して陸へ上がって撮ろうとした時、ガイドが急いで海の中へ入れと叫びました。後ろを振り向くと大型船が通過していて、もし、他のガイドなどに見られると首になるので、首を切るサインを何回も出していました。

【SKY DANCER】

食事は朝がバイキングスタイルでエッグ、トーストはオーダーできましたが、ココ島のシーハンターの方が全体的にグレードは上でした。只、ビールなどの飲み物がシーハンターでは有料でしたが、SKY DANCER はすべて無料でした。アロハ風シャツが65ドル、Tシャツが35ドルでセンスが悪くほとんど買う人はいませんでした。

船室は高い部屋(3,995ドル)と安い部屋(3,795ドル)に分かれていました。我々日本人4人は2階に4部屋ある高い部屋の2室で、地下の船底の安い部屋にはアメリカ人、イギリス人、オランダ人などがいました。

違いは窓の大きさと位置、バスルームの位置、あちこち段差のある作り等で、ベッドの大きさも断然2階の方が広いです。安い部屋は狭い分、片方一面鏡の壁で、あまり落ち着けない感じです。安い部屋の人がよくサロンに居たのにはうなずけます。10泊で200\$しか変わらないので、高い部屋をお勧めします。

SKY DANCER は乗客16名、船長、ダイビングガイド2名、クルー7名の合計26名ですが、船長は夜の移動時に操舵しているため、昼間は寝ていて余り見かけず、昼間は洗濯・掃除担当のクルーが代わりに舵を取っていました。

最後の夜に5名が下船するため、その前日の夜に食事コーナーを風船と色紙で飾り付けし、余興とディスコタイムで盛りあがりました。船長が古代の指導者に変装して悪者を裁き、人間を動物に変えてしまう役で動物に変えられる役は我々乗客で日本人はペンギンでした。

【その他】

キトからガラパゴスへのゴーイングフライト時間をキトの現地係員が出発前日にホテルへ連絡してくる予定でしたが、いい加減でしっかり仕事をせず、前日は何の連絡もなく、ホテルのフロントに協力して載って何十回も電話をかけてもらいました。また部屋からも何十回も電話しましたが、結局担当者をつまえることができず、前日の夜は本当にガラパゴスへ行けるのか心配で眠れませんでした。

ガラパゴスからキトへのリターンフライトをSKY DANCER のガイドと船長に1/8から1/10へ変更依頼し、変更OKと云われていましたが、念のため1/8の朝、タメ航空事務所へ行って確認すると1/8のフライトのままでした。また、ホテル『ガラパゴス』に是非宿泊したかったので、この件も同時に依頼し、予約OKと云われていましたが、下船してガイドと一緒にホテルに行くと何故か予約できていませんでした。ガイドがプエルト・アヨラに住んでいるので最も新しいホテル『LOBO DE MAR』(ロボ・デ・マール：税込1泊約50ドル)を紹介してもらい、何とか3泊出来ました。このホテルの部屋が結構広く、古いホテルに新しい建物を増築したので非常にきれいで地の利も良く、タメ航空の裏にあって繁華街のド真ん中にあり、買い物や魚市場などに大変便りで結果的に大変良かったです。今回の教訓としてSKY DANCER では乗船してからスケジュールを余り変更しないほうが良いと思います。もし、変更

した場合は必ず最後の確認を自分ですることが必要です。

ガラパゴスからキトへ戻るフライトでバルトラ島のタメ航空搭乗手続所にてオーバーウエイトで超過料金を請求されました。ダイビング機材と撮影機材等で機内持ち込み荷物（ビデオカメラ2台等）約10kg以外に預ける荷物がプロテックス2個で約70kgあります。規定では1人20kg迄のため超過料金は1kg当たり3ドル×オーバーウエイト50kg = 150ドルになります。キトからのフライトはグループだったので免除されましたが、帰りは個人のため請求されました。趣味でガラパゴスのプロモーションビデオを撮影して日本で宣伝する予定とか、お土産をたくさん買ったのでお金がないとか、何とかディスカウントしてもらうために理由をアレコレ考えて頼みました。150ドルは現地では約1ヶ月分の月収になるため、係員達のスペイン語の会話は分かりませんでしたが、きっととんでもない超過料金であることには間違いないので、どうしようか話し合っていました。その結果、結局150ドルから30ドルになりました。タクシー半日のチャーターが30ドルなので現地では決して安くはありません。

今回のSKY DANCERのクルーズ費用は3,995ドル（他にチップ200ドル、国立公園入園料100ドル、チャンパー維持費35ドルが必要）。

首都キトの平均年収は2,400ドルでSKY DANCERクルーの年収は4,000ドル、ガイドは10,000ドルで日本と違ってエクアドルではかなり恵まれた良い仕事です。

2. サンタ・クルス島プエルト・アヨラ

現在の人口は約7,000人で子供が多く、近い将来かなりの人工増加が予想されます。汚水排水処理設備が無い建物は政府の許可が下りないので、生活廃水の垂れ流しはありませんが、海岸沿いの海は決してきれいな海ではありませんでした。その海に海イグアナ、アシカ、ペリカンなどが生息し海岸には海イグアナがたくさん寝そべっていました。

1日目は町を徘徊してお土産屋を物色し、魚市場へ行き、チャールズ・ダーウィン研究所に行きました。2日目はサンタ・クルス島の高地に住むゾウガメを見に行きました。毎日午後4時頃にオープンする魚市場ではマグロ、ハタの大物がたくさん並び、解体時に出る余り物を目当てに30羽以上のペリカンや鳥が集まってきて、時には小さい魚をそのまま横取りしようと企む不屈きペリカンを子供がホウキで追い掃っていました。

チャールズ・ダーウィン研究所では各島のゾウガメがたくさん飼育され、また陸イグアナも飼育されています。クルーズのスケジュールに入っていますが時間が短く、別の日に個人で行ったので2時間以上もゆっくり見れて充分撮影できました。只、残念ながらあの有名なピンタ島最後の1頭になったロンサム・ジョージには会えませんでした。ここのTシャツは評判が良くお土産屋は満員でした。いつもの習慣で記念にTシャツをたくさん買ってしまいました。

ガラパゴスを有名にしたのは確かにチャールズ・ダーウィンですが、進化論を

考えたのはダーウィンではなく、アルフレッド・ラッセル・ウォレスだと思っていますので、何か複雑な気持ちでした。

あるゾウガメが寝ていたので撮影のため起きて戴き、近くの草花をちぎって与えると美味しそうに食べ始め、無くなると声を出して催促するので調子に乗ってたくさんあげました。(指を噛まれると簡単にちぎれるので決して真似をしないで下さい)

(参考)

進化論の初版はダーウィンとウォレスの2人の連名で世の中に出ましたが、いつの間にかウォレスの名前が消されました。ダーウィンは名門の子息で英国アカデミー会員でしたが、ウォレスはスコットランド地方の片田舎の貧乏人でした。ダーウィンはガラパゴスへ2回行っただけで、現地での研究は約3ヶ月だけで、しかも地質学者としてビーグル号に乗船しています。ウォレスはインドネシアで約17年間も陸と海と川の生物を研究して『マレー半島』を出版しました。ウォレスは生物が進化する論文をダーウィンへ送り、その後、進化論が世の中に発表されました。ダーウィンはウォレスへウォレスが死ぬまで生活費の仕送りをしていました。ウォレスの名前は世界地図に残っています。インドネシアのバリ島とロンボク島との間に引かれたアジアの生物とオーストラリアの生物を分ける生物分布線で、ウォレス線と呼ばれています。

標高400m近い山を越えて島の東側のハイランド(高地)に約1,000匹いる自然の中のゾウガメを見に行きました。長靴に履き替えて雨が降ったり止んだりするので、蒸し暑いカップを着たり脱いだりしながら、ビデオと三脚を持って泥んこでぬかるんだ狭い山道を2時間以上も歩きました。結局見れたのは10匹ぐらいでしたが、その中に100年以上も生きている大きなゾウガメがいました。その甲羅には人が掘った跡があり、遙か昔に心無い人間がした消せない証拠が刻まれていて考えさせられました。

サンセットを撮影するためにタクシーを1時間チャーターしましたが、英語の分からないタクシードライバーとスペイン語の分からない客との会話は全く意志疎通ができず、散々走ってからやっと身振り手振りで目的を理解してもらい、海岸線沿いの道を探しましたが道路がなく、やっとのことで高台のある場所に行きましたが、雨季のため雲が多く撮影できませんでした。ホテルに帰ってシャワーを浴びていると浴室の窓からサンセットの赤い光が見え、慌ててホテルの屋上にある階段用の屋根に昇って、結局ホテルから撮影しました。次の日もホテルの屋上の屋根から撮影しましたが、やはり雨季のため雲が多く美しいサンセットには遭遇できませんでした。

メインストリートには建物の色が非常に派手でカラフルな原色のお土産屋が数軒あり、思わずウッと注目させるほどで、変わった物を売っている店もありますが、Tシャツを売っている店が30軒以上で圧倒的に多いです。

観光客が行き来するメインストリートから一歩中へ入ると、夜は出店で夕食をする地元の人で一杯でした。最後の夜に仲良くなったガイド(サンチャゴ)の

自宅へ誘われクスターの貴重なポスターを記念に戴きました。

数年前には伊勢エビ漁で生活している人々とダーウィン研究所との間で生活権と自然保護の問題でトラブルがあり、ダーウィン研究所に火が付けられました。高価な伊勢エビを乱獲するとウニが増え過ぎ、ウニが増えると海藻が減ります。海イグアナの餌はこの海藻のためダーウィン研究所は自然保護を訴え、貴重な海イグアナを護りました。今では11月と12月のみ伊勢エビ漁が解禁され捕獲できる漁師も決まっています。1月～10月にレストランで伊勢エビを注文すると出てくるのは通常、スリッパー・ロブスター（セミエビ）で、味はやはり伊勢エビより劣ります。

SKY DANCER で一緒だった日本人が帰国後に減圧症になりました。

SKY DANCER 下船後、私はプエルト・アヨラで3泊したので、体内窒素はほぼ抜けましたが、下船後すぐにキトへ戻った場合、標高が高いので減圧症のリスクが高くなります。一生に何度も行けないところなので、是非プエルト・アヨラで数泊してからキトへ戻ることをお勧めします。

もし、日程に余裕がない場合はキトでなくグアヤキルへ戻れば平地のため、減圧症のリスクは低くなります。またガラパゴスからのリターンフライトはグアヤキル経由キトのためダイビング後のフライト時間も短く、コンチネンタル国際線の場合、リターンフライトはキト発グアヤキル経由アメリカのため、平地滞在時間も増え、フライトの面でもグアヤキルに戻るのが便利です。

但し、キトより治安が悪いので安全上のリスクはあります。

3．首都キト

標高約2,800mに位置しているため赤道直下にも関わらず、気温は朝晩10度前後、昼でも20度前後で少し寒いです。

世界遺産の旧市街（セントロ）は建物の前にたくさんのいろんな出店が所狭しとズラッと並んでいて、その数に圧倒され（おそらく1,000件以上）日本の元旦のお宮参りのような大変な人通りで観光客よりもほとんど地元の買い物客で賑わっていました。目覚まし時計のアラームを鳴らしながら時計を売り歩くオジサン、出店で売る商品を背中に目一杯背負って屈みながら運んでいる運び屋さん、出店の横で売りながら食事をしている人、インカ文明から変わらない服装のインディヘナのオバサン、多種多様な人が行き交う場所でスリに気をつけながら、立ち食いをしてしながら、2時間以上も世界遺産の中にドブプリと身を置いてみました。坂の上から見下ろすセントロは遥かいにしえのインカ文明滅亡後のスペイン王朝支配による全盛期を彷彿とさせ、インパクトのある強烈な記憶として脳裏に焼き付きました。

キトから帰国する夜に国際線搭乗手続き場所で爆弾騒ぎがあり、軍隊が出動し警察犬2匹が爆弾を探していました。結局、何も見つかりませんでした。寒空のゲートの外で1時間以上も搭乗者全員とパイロットなどの航空関係者が待機させられました。搭乗手続きをしてボーディングパスを通過し、やれやれと一

息着いて休憩しているとプロテックスの荷物 2 個の中身をチェックしたいと呼び出され、とことん中を調べられました。飛行機は 1 時間以上も遅れてアメリカに無事到着し、爆発もなく墜落せずに本当に良かったです。

今回の撮影は 60 分デジタルテープで水中 5 本、陸上 7 本の合計 12 本です。ビデオのタイトルは『The Lost Paradise』に決定しました。尚、エクアドル (ECUADOR) とはスペイン語で『赤道』の意味です。

(参考) 撮影機材は以下の通りです。

ビデオカメラは SONY の 3CCD 『VX - 1000』 2 台。

1 台目は水中専用、2 台目は水面と陸上専用及び水中用のバックアップ。

ビデオライトは米国製の SUNREY 『S - PRO』 2 灯(太陽光と同じ白色灯)。

ハウジングは水中用が米国製の SEA&SEA 『VX - 1000PRO』、水面用は神奈川の改造 SHOP による特注の改造ハウジング (10m 防水)。

以上
浜谷 優